

パリが生んだ苦悩の画家 モーリス・ユトリロ展

日本橋高島屋 2020. 03. 04～03. 15 京都高島屋 2020. 03. 18～04. 06

横浜高島屋 2020. 05. 23～06. 08



「モーリス・ユトリロ」(1883～1955)は、パリ・モンマルトンで生まれ育ち、そこで生涯を終えた生粋のパリジャンで、作品は一貫してパリの哀愁漂う街並みの風景を描き続けた近代フランス画家である。

画伯の最も充実した作品は、1908～14年に作成された「白の時代」で、一見平凡である街景でありながら、微妙なニュアンスをたたえた「白」が広がる画面には、現実にはない魅力と詩情がある。

画伯の作品のほとんどは「風景画」で、それも小路、教会、運河などの身近なパリの風景を描いたもので、ありふれた街の風景を描きながら、その画面は不思議な詩情と静謐さに満ちていて、特に壁などの色に用いられた独特の「白色」が印象的であるのが大きな特徴である。

ただ、彼の人生は、国家の勲章やパリ市民賞などの栄誉を得ながらも幸せとは縁遠く、母親が自分の恋愛を優先し育児を放棄したために、寂しい「ユトリロ」は、幼少期から飲酒を覚え生涯を通し「アルコール依存症」を患った。

本展は、没後65年に国内3か所の高島屋で「人生を彷徨した画家の光と影。日本初公開をはじめ約75点が一同に。」と題して、「ユトリロ」の数奇な人生にスポットを当て、絵画の裏に潜むドラマを作品と共に紹介している。

さらに、「ユトリロ」の作品だけでなく、母親「ヴァラドン」や友人「ユッテル」、母親と親交のあった巨匠「ルノアール」、妻「ヴァロール」の本邦初公開となる油彩画まで、画伯とゆかりのある画家の作品が展示されている。

